

月刊

# 地域保健

8  
2014

●座談会

## 地域包括ケアシステムの構築に向けて —保健所の役割を中心に—

●フロントランナー

佐藤 学さん《横浜市 健康福祉部 健康推進課 健康の駅係》

●ピープル

六車由実さん《デイサービス「すまいるほーむ」 管理者・生活相談員、民俗研究者（介護民俗学）》



## 6 座談会

地域包括ケアシステムの構築  
に向けて ～保健所の役割を中心に～

出席者

中板 育美さん（日本看護協会）＝司会

鎌田久美子さん（福岡県糸島保健福祉事務所、全国保健師長会）

秋葉利恵子さん（常総市）

中川 昭生さん（島根県出雲保健所）

34 《解説》地域包括ケアシステムとは

1 フロントランナー 佐藤 学さん（横手市 健康福祉部 健康推進課 健康の駅係）

42 隔月連載 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは《第3回》

48 FOCUS 難病が新しく法制化される今、保健師活動を考える

56 PICK UP 日本の子どもの幸福度

97 ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！

板垣文緒さん（練馬区 健康福祉事業本部 健康部 健康推進課 健康づくり係）

102 ピープル 六車由実さん（デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員  
民俗研究者〈介護民俗学〉）

連載

64 保健師のための閑話ケア《第44回》

藤本裕明

68 中臣さんの 環境衛生ウォッチング《第29回》

中臣昌広

73 いまどき子育てアドバイス《第203回》

中川信子

秋田県  
横手市

健康の駅は人と命の交差点。老若男女に関わる保健活動を目指して  
保健師の仕事は「健康で生きていることに幸せを感じられる」魔法をかけること



佐藤 学さん

● 横手市 健康福祉部 健康推進課 健康の駅係



奥羽山脈を源流とした横手川が、横手盆地の市街地をゆつたりと流れる秋田県横手市。豊かな田畑が広がり、日本有数のホップ生産地でもある。冬は雪深く、小正月にかまくらが100個ほど立ち並ぶ風景は外国人にも人気が高い。横手市で生まれ育ち、保健師となつて健康の駅推進事業に尽力してきた佐藤学さんにお話を伺った。

## 利用者が50人なら 50人全員に声を掛ける

健康の駅事業は、「老若男女問わず地域の健康交流拠点として健康維持増



進プログラムを実施している」などの基準を満たせば、健康の駅推進機構により認証を受けることができる全国的な取り組みである。横手市では、大・中・小規模の健康の駅を開設し、幅広い年齢層の健康づくりを支援している。取材日は、横手駅近くの「健康の駅よこて東部トレーニングセンター」で「生活習慣改善教室」が開催された。「きょうは体操やトレーニングに加えて、栄養士も入って皆さんの食事の栄養指導も行います。トレーニングをしながら世間話もしますし、健康相談も行います。運動を入り口にして一人一人に合った健康づくりを支援することを心掛けています」

佐藤さんがそう説明する間にも続々と参加者が集まり、運動指導員が笑顔で出迎えて言葉を交わす。

「健康運動教室はもちろんですが、健康増進タイムという個人で利用できる時間帯にも、利用者が50人いたら、ス

横手市街地を一望できる丘に建つ横手城（右）。明治の建造物・旧日新館（左）や、増田町の伝統的な町並みも見応えがある。かまくら館では1年中実物のかまくらを体験可能（中・上）。横手焼きそばは昔から愛される懐かしい味だ（同・下）



# 地域包括ケアシステムの構築に向けて

保健所の役割を中心に

各地で地域包括ケアシステムの構築に向けた動きが加速している。住まい・医療・介護・予防・生活支援の一体的な提供を目指す地域包括ケアシステムは領域が広く、全容を把握するのは容易ではない。市町村が中心と目される中で保健所の果たすべき役割は何か。多職種が関わる中で保健師の役割は何か。本誌では地域包括ケアシステムについて今月号と10月号の2回に分けて扱う。

今月号では、市町村が主体となり地域の実情に応じたシステムをつくり始める中で、保健所の役割や市町村との連携が明確ではない点に着目。保健所の果たすべき役割について座談会で語り合う。



司会  
◆日本看護協会  
中板育美さん



◆島根県出雲保健所  
中川昭生さん



◆常総市  
秋葉利恵子さん



◆福岡県糸島保健福祉事務所  
全国保健師長会  
鎌田久美子さん



**中板** 日本看護協会の中板です。先生方におかれましては、お忙しい中、お集りいただき、ありがとうございます。

きょうの座談会のテーマは「地域包括ケアシステムの構築に向けて」です。

改訂された「地域保健対策の推進に関する基本的な指針」と「地域における保健師の保健活動に関する指針」では、都道府県や市町村の責務として、包括的な保健、医療、福祉、介護のサービス提供やシステム構築を掲げています。

昨年夏に公表された社会保障制度改革国民会議の報告書でも地域包括ケアシステムの推進を強調しています（※1）。

また、介護保険法が改正され、介護予防給付の訪問介護と通所介護については、地域の実情に応じた地域支援事業として市町村が担うことになりました。これはまさに地域づくり、ヘルスプロモーションで、市町村には介護が必要な状態にならないような、ダイナミックな動きが求められています。

このように今、地域包括ケアシステムには大きな期待が寄せられています。が、市町村にばかりスポットが当たり、なかなか保健所の役割が見えてこないところがあります。

そこできょうは、市町村における介護予防の個別の活動や地域包括支援センターの話ではなく、地域包括ケアシステムの仕組みを整えていく中で、保健所も含めていかに公衆衛生の視点を入れていくかに重きを置いて話し合いたいと思います。

島根県からは出雲保健所の中川昭生所長にご出席いただきました。同県は介護と医療の連携がしっかりしていることで知られていますので、きょうは保健所長としての立場も含め、そのあたりの話も伺えればと思っています。

鎌田久美子さんは福岡県の保健師で、本庁在籍中に医療と介護を結び付けて在宅医療を推進してきた実績があります。今年度から糸島保健福祉事務

所（以下、糸島保健所）のほうに異動

されましたが、「地域包括ケアシステム構築では保健所もしっかり関わる」というメッセージを発信していただければと思っています。また、この4月からは全国保健師長会の会長に就かれたので、その立場からの発言も期待しています。

茨城県常総市の秋葉利恵子さんは、最近、県と一緒に地域包括ケアシステム構築に向けて歩みだされたということです。市町村では地域包括ケアの流れが来ているのを幸いとして、いかに地域づくり、健康づくりを進めていくかを考える良い機会となっていますので、介護保険の狭い話題ではなく、地域づくりも含めたダイナミックな話を期待しています。

**中川** 島根県出雲保健所長の中川です。この4月に本庁から異動したばかりで、ようやく管内状況を把握できて

きたところです。

島根県は、保健所と市町村の連携もよく、地区組織を主体とした健康づくり活動を協働して推進してきています。しかし介護については、県の福祉事務所が全て町村に移譲され、保健所と福祉事務所の統合組織から保健所単独組織に戻ってからは、関わりたくても関与できない状況になりました。そのため、地域包括ケアシステムについてもようやく取り組みを開始したところ

**鎌田** 糸島保健所の鎌田です。この4月に本庁から9年ぶりに保健所に異動し、県民の皆さんと身近なところで仕事をできる喜びを感じております。また、全国保健師長会の会長も、この4月から務めさせていただくことになりました。

きょうは福岡県において東京大学大学院の村嶋幸代教授（現〓大分県立看護

#### ※1 社会保障制度改革国民会議の報告書（概要）から一部抜粋

##### （4）医療と介護の連携と地域包括ケアシステムというネットワークの構築

- 「医療から介護へ」、「病院・施設から地域・在宅へ」の観点から、医療の見直しと介護の見直しは一体となって行う必要。
- 地域包括ケアシステムづくりを推進していく必要があり、平成27年度からの介護保険事業計画を「地域包括ケア計画」と位置づけ。
- 地域支援事業について、在宅医療・介護連携の推進、生活支援サービスの充実等を行いつつ、新たな効率的な事業として再構築。要支援者に対する介護予防給付について、市町村が地域の実情に応じ、住民主体の取組等を積極的に活用し、柔軟かつ効率的にサービスを提供できるよう、受け皿を確保しながら、段階的に新たな事業に移行。

科学大学学長のご指導・支援を得ながら保健所を中核とした在宅医療の体制整備に取り組んできた経過を通して、地域包括ケアシステムの構築への保健所の関わりについてお話しできればと思っています。よろしく願います。

**秋葉** 茨城県の常総市の秋葉です。常総市は茨城県の南西部にあり、都心から55キロメートル圏内に位置しています。人口は約6万5600人、高齢化率は24・9%です（2014（平成26）年4月1日現在）。高齢化率は地区によって差が大きく、34%を越す地区もあれば15%程度の地区もあり、活用できる社会資源も地区によって大きく異なっています。

地域包括ケアシステムの構築についてはどのように進めていけばよいのか悩みながら手さぐりの状態であります。きょうは、ほかの地域の様子や今後の進め方のヒントを学ばせていただ





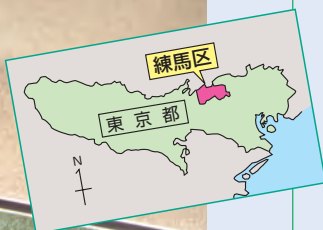
# 情報発信は「魅せる」こと 創意工夫しながら 健康の大切さを伝えていきたい



いたがき ふみお

板垣文緒さん

●練馬区 健康福祉事業本部  
健康部 健康推進課  
健康づくり係



文=白井美樹（ライター） 写真= C.Kent

小柄で、かわいらしい印象の板垣文緒さん。練馬区役所に保健師として着任して5年目になるそうだが、実はそれ以前にさまざまなキャリアを積んできた、ある意味「異色」のひよこさんだ。そうした豊富な経験は、業務の中でどのように生かされているのだろうか。

## 看護師から保健師に転身

北海道苫小牧市生まれの板垣さん。キャリアのスタートは、地元での看護師だった。この仕事を選んだ背景には、お母さんの影響が多分にあったらしい。

「いつも私に、『これからは、女性は資格を持ってできる仕事がいいわよ。看護師さんはどう?』と勧めていました。母は看護師ではなかったのですが、病院で働いていたので、私にとって病院は身近な場所でした。そんなこともあり、自然と看護師を目指したのです」

資格を取得して数年間は、地元の病院の病棟看護師として働き、その後、上京してからも、いろいろなバイトを掛け持ちしながら看護師を続けた。トータルで9年間、医療の仕事に従事する中で、次第にある思いが膨らんでいったという。

「看護師という職業柄、さまざまな場面で健康相談を受けました。中でも多かったのが、企業で働く人たちのメンタル的な健康相談でした。もっと上手に話が聞けるようにと、カウンセラーの勉強もしましたね。そうするうちに、頑張っただけで働いている人たちの健康を、もっと支えられる仕事はないかと思うようになっていきました」

それから産業看護師という仕事があることを知った板垣さんは、看護師を辞め、1年間、保健師の専門学校に通うことにした。

しかし、実際に板垣さんが選択したのは、産業保健師ではなく、行政保健

師だった。専門学校の実習で行政に行った時に、地区の住民のさまざまな健康課題を一手に引き受ける行政保健師の仕事を見て、「面白そう」と感じただめだ。

1年間、他の自治体で嘱託保健師として働きながら、特別区採用試験を受けた。自分が住んでいる練馬区を希望すると、その通りに採用が決定。「近から通勤が楽かな」と軽い気持ちで応募したそうだが、かねて「練馬区の保健師さんの活動は素晴らしい」という評判を聞いていたこともあり、やりがいがありそうだと感じていた。

最初の配属先は、石神井保健相談所。配属当時、保健師1人に対し約1万5千〜2万の担当人口だった。住民からの相談は想像以上に多く、業務内容も多岐に渡る忙しい現場。保健師としては新人だったが、医療従事者としての実務経験があったため、見学よりもまずは実践という形で育てられた。



# 「介護民俗学」が、介護の世界の

新しい風になるとうれしい



デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員  
民俗研究者（介護民俗学）

## 六車由実さん

聞き手

白井美樹（ライター）



写真：カミヤス セイ

静岡県沼津市にある小規模デイサービス「すまいるほーむ」。ここに管理者および生活相談員として勤める六車由実さんは、かつては大学で民俗学の准教授として教鞭をとっていた。  
学問の世界から介護の世界へ……。一般的にみたら異例ともいえる転身だ。その六車さんに、介護現場への熱い思いを語ってもらった。

### 民俗学者から介護職員に

—そもそも民俗学というジャンルに興味を持つようになったきっかけは？

**六車** 私は沼津市の新興住宅地の生まれで、伝統的な文化や神社のお祭りなどがまったくない地域で育ちました。そんな私が民俗学に興味を引かれるようになったのは大学時代でした。

折しも、そのころ、日本ではお米の凶作続きで、「平成米騒動」なんて言葉が社会をにぎわしていました。その時にふと思ったのが、「日本人は米

民族といわれるけれど、なぜだろう本当にそうなのだろうか」ということだったので。

その疑問を解決するために、山間部の村に入ってご老人に話を聞くフィールドワークを始めました。その結果、実際に神に米をささげていた地域もあれば、イモや肉をささげていた地域もありました。そして、決して日本人は米民族とは言い切れないことが分かったのです。ちなみに卒論も「米と日本人」というテーマで書き上げました。

—その後、民俗学の研究を深めるために大学院へ進んで、修士号、博士号を

## PROFILE

●むぐるま・ゆみ●

1970年静岡県生れ。沼津市内のデイサービス「すまいるほーむ」の管理者・生活相談員。社会福祉士。介護福祉士。大阪大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。民俗学専攻。2009年から、静岡県東部地区の特別養護老人ホームに介護職員として勤務し、2012年10月から現職。「介護民俗学」を提唱。著書『神、人を喰う』（新曜社）が第25回サントリー学芸賞受賞。『驚きの介護民俗学』（医学書院）が第20回旅の文化奨励賞、第2回日本医学ジャーナリスト協会賞大賞受賞。

取得されたのですね。

**六車** 研究を続けたのは、多分、自分が育った地域に民俗の伝統と呼べるものがなかったもので、そういうものに出会うと、人一倍「なぜ？」という疑問が湧き上がったからでしょうね。

それから、歴史学であれば文字を読